とうちんのエッセイ　2004

水庭とアオサギ

佐藤　透

川魚の採取と飼育はその後も限りなく続いていますが、今回は、うちの水庭(池)への来訪者、蒼鷺（アオサギ）のサギ太くんをご紹介致します。

昨秋のこと、居間の南にある水庭に小赤、姉金、コメットなど夜店で掬い取った金魚を放した。水溜りだけの水庭ではちと淋しいし、苔も生えるしボーフラも湧く、楽しめる池として有効活用するのがいい。でもやっぱ金魚飼うんならゆらゆらと泳ぐ琉金（リュウキン）、なかでも定番の黒出目金、優雅な東錦（アズマニシキ）、上品な丹頂がいいかな。あたまにこぶのあるオランダ獅子頭（シシガシラ）、背びれのない蘭鋳（ランチュウ）、変り種の水泡眼や頂天眼（チョウテンガン）もいいけど、格好とともにみんなだんだんと泳ぎが下手くそになるもんだ。朝の食卓から眺めやる貴重な時間、でもなんとなく最近数が減ってるんじゃない？餌も特別やらんし水流ポンプだけで水も換えんし、自然とおらんようになるんかも？あれえ、この前入れたばかりの江戸錦がいないんじゃないの？ほどよい肉瘤もりもりであれって高かったのに。死んだわけでもないしどこにいったんじゃろう、痕跡すら残っとらん。これって絶対におかしいよね。さては、ちょくちょく遊びに来る向こう隣りの黒猫の仕業だな？そうそう何時ぞやは淵からじっと覗き込んでたっけ？こんど来たらぼうたらんといけん。

晩秋のある朝夜明けのこと、トイレの帰り、薄明かりの中に池の端でたたずみ水面を伺う大きな鳥を見つけた。こりゃあ、なんじゃでっかいのう。なにしとんじゃろ、だまあて人んちひゃあて来て。ちとわかげなザギじゃなぁ、じっとしていつまでたっても動きゃあせん、置物かのうこりゃ、あっちぃ-と動いた、ほなやっぱ生きとるなあ。S字にこくれた首、灰色まじりのくすんだぼろっちい羽、色褪せた黄色い嘴、摩れた足、でもやっぱすらりとなげえなあ、こんちくしょう。とその瞬間、水が跳ねた時にはすでに嘴から金魚のひれがはみでていた。まさに瞬間芸、おみごと！じゃなかった、そうかそうだったんかぁ、こいつかあ、こいつがやったんだ。それでたまに池面に白粉と羽根が浮いとったんか。そういや、車庫の屋根に干からびた魚の骨格標本が散らばっとったなぁ。

なんとかせにゃいけん。さっそく、赤外線検知のセンサライト、目を光らせ吠える電動見張り犬、鳥の嫌がる磁気を発生するという防鳥器、吊り下げるときらきら光る中古の CD・DVD などいろいろと試したが、効果はゼロ。目には目をで、ビー玉目玉の人造フクロウ、それなら本物のきじの剥製は

どうじゃろと、試行錯誤、でも金魚はおらんようになってく。いっそのこと池を全部隠してしまうのが一番じゃで、と水庭の池全体を葦簾（よしず）で覆った。これでなかの金魚は捕られはせん、じゃけどこれじゃぁせっかくのお魚さんは隠れて見えんね。究極の対策、それじゃやっぱ捕まえたるか、あわよくばサギ鍋じゃ、“満月の夜サギは太っている”ウッシッシ。庇(ひさし)から池淵まで錘をつけたテグスを 50cm間隔に張り、水中にも仕掛けを沈めて、蒼鷺防除・捕獲作戦は極秘裏に進行している。

アオサギって、日本にいるサギの仲間では最大で全長 90-98cm、翼開長 160-175cmにもなる怪鳥。コウノトリ目サギ科で、そういえばよく似た姿にもみえる。樹上に枯枝・枯草で大きな皿型の巣を作り、一夫一妻で年に一回 4-9 月に繁殖する。ゴアーッという鳴き声で雨を呼ぶ山下達郎の歌に登場するあの伝説の“ヘロン”がこの鳥で、アジア各国では崇拝されているという。野生なものは貪欲で、小さい魚は嘴で挟んで、大きなものは串刺しに突き刺して捕える。この辺り松永湾沿いには干潟もまだまだ残っており、餌場はそこらじゅうにあるはずで、なにも危険を冒してまでうちの水庭にこなーでもええのに。

うちのサギ太は、昨夏生まれで今 1.5 歳くらい、雌雄同色で区別はつかないけどたぶん雄だと思う。昨秋の幼鳥時代には全体がくすんだ色合いだった。しかし、この春、あっと驚く美しい成鳥となって庭にもどってきた。夏羽となり、頭頂には白い帽子、黄色い瞳、額から後頭部にかけて青黒い帯状眉班、後ろ頭には立派な冠羽のひもを垂らす。嘴は赤黄色く、顔から頚部は乳白色、青い縦班ネクタイと翼角の藍色ワッペン、体は風切羽の黒と雨覆羽の白とでコントラストされた艶々した羽で覆われ、少しピンク色した長い足で立っていた。凛としたその姿は壮観で魅了されてしまう。

いっそうのこと餌付けでもしてみようか。水庭池の東側は、テグスを厳重に張り巡らせて、見て楽しめるお魚さんのスペース。西側の 1/4 は葦簾をはずして蒼鷺の餌場にしようか。優雅な泳ぎの琉金やふりふり泳ぎの蘭鋳など逃げ足が遅い金魚は難しいけど、素早く泳ぐ和金か嘴よりも大きい錦鯉なら大丈夫かも。サギ太との出会い、生態系の中での偶然の巡り合わせ、異質なものが共生して一緒に生きてゆくのがいい。楽しんで生きるためには相手が必要、相手を生かすには多少の犠牲も払わにゃならんしできる我慢はせんといけんなあ。（おまけ：サギ草の立体視3D 画像、ほんによう似とるかも。）